

(1)

外来語の連体修飾における 「一の」型から「一な」型への交替

片岡 みなみ

1. はじめに

現代語において、事物の性質や状態を表す外来語が連体修飾を行うとき、通常は以下のように、「一な」の形（以下、「一な」型）を用いる。

- (1) a. 高エネルギーの食品にかたよったアンバランスな状態である
(『おいしく食べて治す高血圧』[2003] PB34_00129, 9130)¹
- b. 当地のオーソドックスな考え方である
(『からくり民主主義』[2002] LBq3_00102, 3620)
- c. 分割すれば、スムーズな運用が可能になる
(『Red Hat Linux 8 で作るネットワークサーバ構築ガイド』[2003] PB35_00251, 20170)
- d. どううまく統御するかという枢要なテクニカルな問題が存在した
(『二十世紀数学思想』[2001] PB14_00161, 1780)
- e. それにもっとロマンチックな感じにしてほしい
(『誤解の代償』[2001] PB19_00433, 43170)

これらの語は、小学館『日本国語大辞典』第2版（以下『日国』）では形容動詞として分類されている。学校文法における形容動詞の連体形が「一な」であることを踏まえると、現代において形容動詞は「一な」型で連体修飾を行うという認識がされているものと考えられる。

一方、(1)と同様の外来語において、近代語の資料では「一な」型ではなく、次のような「一の」の形（以下、「一の」型）で連体修飾を行う例が見られる。

- (2) a. 日本の産業界は一部少数の繊維工業を除く外は全くアンバランスの状態に在る
(1931年11月『大阪時事新報』)

¹ 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（以下 CHJ）、『昭和話し言葉コーパス モニター公開版』（以下 SSC）、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）の用例は、サンプル ID と開始番号を示す。

- b. もちろんオーソドックスの考え方をすれば白票は政治的に意味がない
(1937年5月『大阪毎日新聞』)
- c. 通貨政策のスムーズの運用が出来難い情勢に置かれていた
(1932年3月『大阪時事新報』)
- d. 政府と承認す可きや否やの如き寧ろ無用なるテクニカルの問題にして
(1920年3月『時事新報』)
- e. 発達史をたずねると殆どロマンティックの感じを吾人に与える
(1924年2月『大阪朝日新聞』)

漢語においては、田野村（2008）や永澤（2011）、小木曾（2008）によって、連体修飾形における全体的な動きとして「一の」型から「一な」型への交替が起こったことが確認されている。一方、外来語においては、戸田（2004）や渡邊（2014）のような、類義語との比較を通して、「一な」型の連体修飾用法を持つ特定の外来語の意味用法を明らかにしている研究はあるものの、漢語において行われているような、外来語の連体修飾形の全体的な年代推移についての研究はされていない。

しかし、外来語においても、現代で（1）のように「一な」型の連体修飾が一般的である語の中に、近代では（2）のような「一の」型の連体修飾が用いられていたものがあると確認できる。このことから、外来語の連体修飾形においても、漢語と同様に、「一の」型から「一な」型への交替が起こったことが想定される。

そこで本稿では、近代から現代における外来語の連体修飾形「一の」型と「一な」型の年代推移を明らかにすることを目的とする。冒頭に挙げた（1）、（2）を一つの事例として、漢語に見られるような「一な」型への移行が、外来語でも見られるのかという点に着目し、「一の」「一な」型が各時代においてどのような割合で用いられているのか調査を行い、交替の過程を記述する。

2. 先行研究の整理

2.1 漢語の連体修飾における「一な」型の増加

田野村（2008）は、1940～2000年代の国会会議録のデータを利用して、漢語における「の」と「な」の使い分けの推移が次の4つの類に分けて捉え得ると述べている。

- (i) 1940年代に「な」の比率が95%を超えており、その後完全に100%に達したものの

(3)

- (ii) 1940年代に「な」の比率が50～90%の範囲にあり、現在では90%を超えたもの
- (iii) 1940年代に「な」の比率が20～40%の範囲にあり、現在では50～80%程度に達しているもの
- (iv) 全期間を通して「な」の比率が概ね10%以下であり、どちらかと言えば全体的に比率が低下する傾向にあるもの

(i)～(iii)のように「の」から「な」へと比重を移す全体的な動きがある一方で、(iv)のようにそれに逆行する動きも確認されることから、形容動詞が「の」と「な」の混用の状態から両者が区別される状態へと向かっている可能性があることを指摘している。この区別には、田野村(2002)で述べられる、「な」と「の」の使い分けが一因として考えられる。田野村(2002)では、「有名な」と「無名の」のような、「有○」「無○」という対を成す形容動詞における「な」と「の」の使い分けについての考察が行われており、「一な」型が程度の大小を問題とすることができる属性を表すのに対し、「一の」型はそうであるかないかと言えない択一的な属性を表す、という意味的な相違があることが述べられている。この相違は、焦(2020)によって、「有○」「無○」以外にも適用されることが示されている。焦(2020)は、前接する語の程度性と形容詞性に深く関わる接尾辞である「一さ」との接続性が、「一な」型がほどほどであるのに対し、「一の」型は極めて弱いことを明らかにしており、このことから「一な」型に比べ「一の」型は程度性が弱い傾向にあると推測している²。

田野村(2008)が行った調査以前の時期を対象年代とするものに、永澤(2011)がある。永澤(2011)は、近代における漢語の連体修飾形(「一の」「一なる」「一な」型)の出現数の年代推移を、『太陽コーパス』(1895～1925年)を対象として、近代期に「一の」型と「一なる」型が衰退し、代わって「一な」型が大きく伸長したことを明らかにしている。さらに、調査対象のうち約7割の語は1917～1925年の区間に「一な」型の増加率が飛躍的に高まっており、「一さ」型の漢語名詞用法の出現数が飛躍的に増加した時期と重なることを指摘している。永澤(2011)は以上の観察に基づき、漢語がこの時期に、品詞を明示する形式を伴わない原初的な名詞として用いられる段階から、和語の接辞「一な」や「一さ」といったマーカーを伴う段階に移行したと述べる。つまり、近代期の「一な」型の伸長を、漢語が原初的な名詞として「一の」や「一なる」と緩い結合

² ただし、「色鮮やか」「希少」「大好き」「完全」「真っ赤」など、程度性が弱い語が「-な」型の中にも一定数存在することも併せて指摘している。

をしていた段階を脱し、形容詞に特化した接辞「一な」を伴う完全な形容詞形として、日本語への同化をより進めたものと永澤（2011）は位置付けている。

また、永澤（2011）と同じく『太陽コーパス』を用いた研究として小木曾（2008）がある。小木曾（2008）は、漢語形容動詞の連体修飾の形における「一の」「一なる」「一な」の揺れを調査し、通時的な変化において一定の傾向を持つグループがあることを示した。グループは、1895年と1925年とを指標として、「な→な」型、「の→な」型、「なる→な」型、「なる→なる・な」型、「の→の」型、「なる・の→な」型の6つに分類されている。小木曾（2008）では、この分布・推移の背後にある要因の解明には至っていない。ただ、6つのうち4つのグループにおいて1925年時点で既に「一な」型のみが用いられるようになっていくという結果からは、永澤（2011）の結果と併せ、漢語の連体修飾において大半の語が1925年までに「一な」型へ交替したことが分かる。また、「一な」型への交替が、文語文が大半を占めていた1895年から、口語文化がほぼ完了した1925年という期間で見られたことを踏まえると、漢語の連体修飾における「一な」の増加には、言文一致の流れも影響していると考えられる。

以上の研究では、漢語における全体的な傾向として「一な」型の連体修飾用法が増加する動きがあったことが明らかにされている。また、そのような動きがあった背景として、「な」と「の」の意味的相違や日本語への同化、言文一致の流れがあるということが考えられる。

2.2 本稿の目的

先行研究では、漢語の連体修飾における「一の」型から「一な」型への交替が明らかにされている。ただし、対象となっているのは漢語であるため、同じ連体修飾においても、漢語で見られるような動きが外来語でも見られるのかは不明である。外来語の連体修飾に関する研究については、渡邊（2014）³や戸田（2004）⁴による、個々の語を対象とした研究があり、ある特定の「一な」型の

³ 渡邊（2014）は、「プライベートな＋名詞」とその類推表現がどのような意味的相違に基づき使い分けられているのかを分析している。「プライベートの＋名詞」とでは、「プライベートの時間」というような、形容語とその対象という関係にある場合は置き換え可能であり、「プライベートの充実」というような、名詞と格関係にある場合は置き換えが不可能であることが確認された。また、「個人的な＋名詞」「私的な＋名詞」とでは、中核の意味スキーマが異なっていることから、どの意味特徴が焦点化されているかによって使い分けられると述べている。

⁴ 戸田（2004）をはじめとして戸田氏は、「シックな」「エレガントな」「ダンディーな」「フェミニンな」「ボーイッシュな」などの特定の外来系「な」形容詞について、和語・漢語の類義語と比較しながら分析し、意味用法を明らかにするという研究を行っている。例えば、「フェミニンな」の意味用法を、「女性」に関わる類義語と比較しながら分析して

(5)

連体修飾用法を持つ外来語の意味用法が、類義語との比較によって明らかにされている。しかし、外来語の連体修飾用法の全体的な傾向や歴史的な推移についての研究は行われていない。

そこで本稿では、外来語の連体修飾用法の全体的な年代推移を明らかにすること、すなわち、田野村（2008）や永澤（2011）、小木曾（2008）が漢語において指摘した、全体的な傾向として「一な」型の連体修飾用法が増加するという動きが、外来語においても見られるのかを解明することを目的とする。具体的には、まず「一な」型の連体修飾用法が増加しているのか、「一の」「一な」型が年代ごとにどのような割合で用いられているのかを調査する。次に、「一な」型の増加が見られる場合には、いつどのように増加したのか、漢語の連体修飾において明らかになったことをもとに考察を行う。また、外来語の「一な」型が、類義語との意味の相違に基づいて出現しているといったことも踏まえ、これまでに研究されてこなかった外来語の連体修飾用法全体の歴史的な傾向を明らかにしたい。

3. 調査方法

『日国』⁵に収録される形容動詞のうち、外来語 336 語を調査対象として、以下のデータベースを用いて「一の」型、「一な」型が出現している用例を抽出した。

- ・『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（以下 CHJ）
明治期から大正期の雑誌、小学校・高等小学校で使用された国定国語科教科書、明治初期刊行の主要な口語体資料
- ・神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『新聞記事文庫』
明治末から昭和 45 年（1970 年）までの新聞切抜資料
- ・全文検索システム『ひまわり』ver.1.6/『青空文庫』パッケージ
明治初期以降に出版された、著作権が切れている 15263 作品
- ・『昭和話し言葉コーパス モニター公開版』（以下 SSC）
1950 年代から 1970 年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料のうち、約 17 時間分の独話音声
- ・全文検索システム『ひまわり』ver.1.6/『国会会議録』パッケージ

おり、若い大人の女性の現代的な斬新さを内包している「フェミニンな」は、「しとやかな」とは大人の女性の古風さを内包している点で異なるということなどをはじめ、複数の観点から意味用法の分析を行っている。

⁵ JapanKnowledge 収録版を使用。

1947年から2012年までの国会の会議録

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(以下 BCCWJ)

1976年から2005年にかけての、出版物として刊行された現代日本語の書き言葉資料

- ・開蔵Ⅱビジュアル『朝日新聞縮刷版 1879～1999』

明治12年(1879年)から平成11年(1999年)までの朝日新聞の全文⁶

用例を抽出する際、映画や本などのタイトル、新聞等の見出しにおいて、用例が複数見られた場合は、初出の例のみを対象とした。また、「ロマンチック」と「ロマンティック」のような、表記のゆれは本稿の問題として取り上げず、『日国』に記載されている表記全てを対象として検索を行った。なお本稿における語の表記は、CHJ, SSC, BCCWJにおける語彙素の表記に従う。

また、比較対象の条件を合わせるために、対象とする形式は、性質・属性を表す連体修飾の「外来語+ {の/な} +名詞」に限定した。対象外となる形式は、陳(2015)⁷と焦(2020)を参考に、以下の(i)～(iii)とする。

(i) 括弧内に示されているものや、前文脈と合成語を成すもの

- (3) a. カントによると先天的（アプリアリ）な直観なのである。

(戸坂潤(著)『辞典』[1931-1937])

- b. 2階のトイレは、家全体に漂う和風モダンのテイストを持ち込んだ、気持ちのよい場所。

(『新しい住まいの設計』[2004] PM41_01329, 17270)

(3)の「一の」「一な」の選択は、下線部の性質ではなく、括弧の前の語や合成語の性質に基づく可能性があると考えられる。本稿では、臨時的と思われるような組み合わせについても合成語に含めて対象外とした。

(ii) 明らかに名詞として用いられているもの

- (4) a. スンシンは料理にはまったく手をつけず、ストレートの焼酎をちびちび飲んでいた。

(『異物』[2005] LBt9_00038, 41190)

- b. クイーンステーキは、スローの追い込みで、上がりは最速。

(『Yahoo!ブログ』[2008] OY15_10695, 20260)

⁶各記事の見出しとキーワードを検索対象とする。

⁷陳(2015)では、「有名/有限/有数+ {の/な} +名詞」という形式について、それぞれの特徴や使用実態を明らかにするという調査が行われている。

(7)

- c. さう言ふワイルドの面影が躍るやうな目覚ましきで浮かんだ
(坂口安吾 (著)『女占師の前にて』[1938])

(4a) の「ストレート」は、「水や氷で薄めたり、他の酒とまぜていない生(き)のままの酒」という意味として解釈され、名詞として用いられていると言える。

(4b) の「スロー」は、競馬の用語として定着している「スローペース」という名詞が省略されていると解釈でき、専門用語として本来の意味とは異なる別語であると考えられる。(4c) の「ワイルド」は「オスカーワイルド」という人名を指しており、このような人名や地名を表しているものは別語であると見なす。このような例については、性質・属性を表すものではないため対象外とした。

(iii) 後文脈との関係によって「の」が現れているもの

- (5) a. 年少の読者諸君にはスリルの意味がよくわかっていないで
(江戸川乱歩 (著)『探偵小説の「謎」』[1952-1955])
b. 美文「波止場の別れ」と称するセンチの極みを尽した一節がある
(1932年1月『時事新報』)
c. 日本のポピュラーの原点探る研究本
(1987年1月夕刊9面『東京朝日新聞』)

(5) のように、外来語の後に続く文脈が「～の意味」「～の極み」「～の原点」といった形式の場合、この形式自体が、前にくる語を名詞として扱う働きを持っているため、「一の」の出現は下線部の性質によるものではないと言える。よって、このような後文脈を持つ用例についても対象外とした。

以上の基準によって対象外となる用例を除外したが、以下の例のように、対象とも対象外とも捉えられる用例も見られる。

- (6) アンティークのカップで飲む中国茶っていいものですね
(『Yahoo!ブログ』[2008] OY14_22088, 1010)

「アンティークのカップ」は、「骨董品であるカップ」とも「年代を経て品格があるカップ」とも解釈することができる。「骨董品」という名詞として解釈した場合には(ii)の形式であると判断し、対象外の用例であると考えることができる。しかし、(ii)で挙げた用例とは異なり、「どんな」「どのような」カップであるかという解釈をすることも可能であるため、性質・属性を表す対象用例である可能性も考えられる。本稿では(6)のような、対象とも対象外とも捉

えられるような用例については、ひとまず調査対象として扱うことにした。このような事例について、本文中に示す場合には脚注で補足するとともに、別途4.3で詳しく扱うこととする。

以上の条件で抽出した用例を持つ語のうち、1例しか見られない語については、「一の」「一な」型の使用の差が個人差によるものであって、当時一般的であったとは言えない可能性があるため対象外とした。また、現在では用例が見られない語についても、その語が「一の」型と「一な」型のどちらに至ったのかが判断できないため、対象外としている。

その結果、本稿で対象とする語は262語となった。この262語について、成立年⁸を基に10年ごとの「一の」「一な」型の使用割合を明らかにし、表1に示す①～⑨の「一の」「一な」型の年代推移のパターンに分類する。

表1 「一の」「一な」型の年代推移のパターン

初出時期の型 ＼現在の型	「一の」専用	「一の」・ 「一な」併用	「一な」専用
「一の」専用	①	④	⑦
「一の」・「一な」 併用	②	⑤	⑧
「一な」専用	③	⑥	⑨

上記の分類をもとに、第4節では、それぞれのグループの用例を確認し、外来語の連体修飾用法全体の傾向として「一な」型が増加する動きがあったことを示す。そして、この結果に基づき、第5節では、「一な」型専用へ移行する語における「一な」型の使用推移を詳しく検討し、「一な」型が増加した年代やその背景について考察を行う。

4. 全体の結果

4.1 全体的な分布

対象とした262語について、分類した結果を表2に示す⁹。

⁸ 成立年は、データベースごとに以下の年を採用した。CHJ, SSC, BCCWJ…成立年／『新聞記事文庫』…出版年／『国会会議録』…開催年／『青空文庫』…初出年／『朝日新聞縮刷版』…発行年

⁹ 分類について、例えば③に分類していたとしても、使われ始めた時期に「一の」が0件ではない語もある。使用割合や成立年が記載されていない用例数を考慮したうえで筆者の判断により分類を行った。

(9)

表2 「一の」「一な」型の年代推移の分布

初出時期の型 ＼現在の型	「一の」専用	「一の」・ 「一な」併用	「一な」専用
「一の」専用	① 8語	④ 2語	⑦ 9語
「一の」・「一な」 併用	② 3語	⑤ 11語	⑧ 21語
「一な」専用	③ 0語	⑥ 6語	⑨ 202語

この結果について、以下、具体例を示しながらグループごとに確認していく。

① 「一の」型専用のままの語 (8語)

- (7) a. 昨年の如き好況時に際してもフルの操業をなしておらず、
(1937年3月『満州日日新聞』)
- b. フルのPVが見たいなら十二月発売のサザンのDVD買えば？
(『Yahoo!知恵袋』[2005] OC02_05557,1410)

このグループには以下の語が該当する。

オールマイティ ノーコメント フル メーン

また、以下の語は、「一な」型の使用も確認されたが、その使用割合が低かったり、ある年代でしか用いられていなかったりしていることから①に分類したものである。

バリアフリー ボーダーレス マキシマム マクロ

② 「一の」「一な」型併用から「一の」型専用へと移行した語 (3語)

- (8) a. 圖書もオリジナルのもので、文も又信ずるに足る、
(『太陽』[1909] 60M 太陽 1909_14043, 64680)
- b. そのときはどうしてもオリジナルのものをつくることになる。
(『ペットフードで健康になる』[2005] PB56_00004, 16330)
- c. 小説を書いてもオリジナルな處があるといふ評判
(高浜虚子(著)『俳諧師』[1908])

このグループには以下の語が該当する。

オリジナル ジグザグ プロパー

③ 「一な」型専用から「一の」型専用へと移行した語 (0語)

このグループに該当する語は、本稿で対象とした語の中には存在しなかった。

④ 「一の」型専用から「一の」「一な」型併用へと移行した語（2語）

- (9) a. 日ソ間のハイレベルの政治会談を、あらゆるチャンスをとらえて呼びかけることが必要だ（第 095 回国会本会議第 05 号 [1981]）
 b. 原子力安全に関するハイレベルの国際会議を日本で開催します。（第 180 回国会本会議第 01 号 [2012]）
 c. 専門家レベルやよりハイレベルな協議を必要に応じて機動的に開催していこう（第 151 回国会本会議第 17 号 [2001]）

このグループには以下の語が該当する。

ハイレベル ミクロ

⑤ 「一の」「一な」型併用のままの語（11語）

- (10) a. その図面が附いている、スタンダードの機械には斯ういうジグを使うと云うことを示して居る
 （1941年9月『中外商業新報』）
 b. 教師がどのようにスタンダードの授業をすることができるか
 （『国際競争力を高めるアメリカの教育戦略』[2002] PB23_00063, 41020）
 c. 彼等は氷をノーマルなスタンダードな状態と考えていた
 （知里真志保（著）『言語と文化史』[1949]）
 d. すっきりとしたスタンダードなデザインだからスタイルを選ばない
 （『WOOFIN'』[2004] PM41_00208, 17630）

このグループには以下の語が該当する。

アンティーク コスモポリタン スタンダード ストレート トータル
 ノーマル フリー プロフェッショナル メタリック リベラル
 ローカル

⑥ 「一な」型専用から「一の」「一な」型併用へと移行した語（6語）

- (11) a. 無期延期に決定の審議はまだ何等オフィシャルな報告に接しないが…
 （1927年8月『大阪朝日新聞』）
 b. 検索したら、事務所のオフィシャルのHP も出てくるはずです。

(11)

(『Yahoo!知恵袋』[2005] OC01_09598,1500)¹⁰

- c. 特にオフィシャルな手紙の場合は、ワープロ文字の方がむしろ衿を正した (『COSMOPOLITAN 日本版』[2004] PM41_00539,87940)

このグループには以下の語が該当する。

イレギュラー エスニック オフィシャル ジャンボ ナンセンス
メンタル

⑦ 「一の」型専用から「一な」型専用へと移行した語 (9語)

- (12) a. 最大原因は船腹の欠乏であって、全くアブノーマルの現象である。

(1918年1月『大阪朝日新聞』)

- b. もつれにもつれたアブノーマルな関係のあとで、

(『集英社ギャラリー「世界の文学」』[1989] LBd9_00013, 124820)

このグループには以下の語が該当する。

アブノーマル アンバランス エゴ エロチック オープン
クラシック デカダン テクニカル ニヒル

⑧ 「一の」「一な」型併用から「一な」型専用へと移行した語 (21語)

- (13) a. 発達史をたずねると殆どロマンティックの感じを吾人に与える。

(1924年2月『大阪朝日新聞』)

- b. かう詠んでロオマンチックな思ひを寄せた若者もあつたのであつた。

(『太陽』[1917] 60M 太陽 1917_04027, 46430)

- c. それにもっとロマンチックな感じにしていひわ

(『誤解の代償』[2001] PB19_00433,43170)

このグループには以下の語が該当する。

アカデミック アダルト アプリオリ インターナショナル
エキゾチック エンドレス オーソドックス コンスタント シリアス
センチメンタル タイト ニヒリスティック ハイカラ ヒステリック
ホット モダン ユーモラス リズミカル リリカル レトロ
ロマンチック

¹⁰ 「オフィシャルのHP」は、「公的なHP」や「公認されているHP」とも「公式であるHP」とも解釈できる、対象とも対象外とも捉えられる用例である。

⑨ 「一な」型専用のままの語 (202 語)

(14) a. あの通りエネルギーギッシュな笛吹川さん

(海野十三 (著) 『赤耀館事件の真相』 [1929])

b. 常に気丈でエネルギーギッシュな女性だった。

(『告白』 [2005] OB6X_00028,28640)

このグループには、上記の「エネルギーギッシュ」の他に、アイロニカル、イージー、カラフル、シック、スタイリッシュ、センチ、チープ、ナイーブ、ハンサム、ファッションナブル、ポジティブ、マット、ルーズ、リアル、ワンダフルといった語が該当する。

4.2 「一な」型への移行

前項の結果から、全体の傾向について考えたい。

まず、⑨（「一な」型専用のままの語）が最も多いことに注目したい。262 語のうち 202 語と、大半の語がそもそも「一な」型で受け入れられていたことは、古代から日本で用いられている漢語とは異なる傾向として確認できる。

また、⑦（「一の」型専用から「一な」型専用へと移行した語）が 9 語、⑧（「一の」「一な」型併用から「一な」型専用へと移行した語）が 21 語と、「一な」型に限定される語があることが確認できる。一方で、「一の」型に限定される語は②（「一の」「一な」型併用から「一の」型専用へと移行した語）の 3 語のみと非常に少ない。そして、③（「一な」型専用から「一の」型専用へと移行した語）が 0 語であることから、「一の」型専用から「一な」型専用へ移行することはあっても、「一な」型専用から「一の」型専用へと移行することはないということが指摘できる。

以上、「一な」型で受け入れられた語が多いことや、「一な」型に限定されるものに比べ「一の」型に限定されるものの割合が非常に低いことから、①（「一の」型専用のままの語）が 8 語確認されるように、全ての語において「一の」型から「一な」型へ交替したとは言えないものの、全体の傾向としては「一な」型の割合が高まる動きがあったとすることができる。

4.3 現代語に見られる「一の」型

外来語の連体修飾用法全体の傾向として、「一な」型の割合が高まる動きが見られるなか、②（「一の」「一な」型併用から「一の」型専用へと移行した語）、④（「一の」型専用から「一の」「一な」型併用へと移行した語）、⑤（「一の」「一な」型併用のままの語）⑥（「一な」型専用から「一の」「一な」型併用へ

(13)

と移行した語)のように、現代においても「一の」型が用いられている語もあることが確認できる。その中には以下のような用例が数多く見られた。

- (15) a. 特にエスニックの魅力を漂わせるのが、ボンド得意の必殺技。
(『Weeklyぴあ』[2003] PM31_00229,3500)
- b. トータルのカロリーがそんなに変わらなければ
(『健康ブームを問う』[2001] PB14_00018,62400)
- c. フリーの人は人気ブランドのバーゲンセールが恋の運気を上げるラッキースポットです。
(『誕生日でわかる Dr.コパの風水大開運』[2005] PB5n_00018,46950)
- d. メンタルのケアを早急に且つ継続的に魂の救済を
(『Yahoo!ブログ』[2008] OY13_04651,8620)

第3節では、(6)「アンティークのカップ」が、性質・属性を表す「年代を経て品格があるカップ」とも、名詞を表す「骨董品であるカップ」とも解釈することができることを述べた。(15)の例はいずれも、これと同様の例として捉えることができる。(15a)は「民族的な魅力」という性質・属性を表す用例とも、「民族的なさまについての魅力」という「何の」を表す用例とも捉えられる。同様に、(15b)は「全体的なカロリー」もしくは「合計のカロリー」、(15c)は「(恋人という制約がなく)自由な人」もしくは「(恋人がいない)という人」、(15d)は「精神的なケア」もしくは「精神のケア」とも解釈することができる。また、(11b)「オフィシャルのHP」についても、「公認されているHP」もしくは「公式であるHP」と解釈できる。上に挙げた、対象外となる後者の解釈は、もともと形容詞として受け入れられていたにも関わらず、名詞の意味としても解釈できるようになったからではないかと考えられる。ただ、前者の解釈のように形容詞の意味としても捉えられるので、完全に名詞化したとは言えない。しかし、本来持っていた形容詞の意味をもっていたものが、外来語として定着するなかで名詞としての意味も持つようになったと考えられることから、抽象的な名詞化を遂げたと考えられるのではないだろうか。

また、②の「オリジナル」「ジグザグ」は、本稿の調査の範囲では現代において「一の」型専用の語となっているものの、直感的には「一な」型を用いても違和感がなく、実際に『日国』においても「一な」型の用例が挙げられている。

以上のことから、現在「一の」型が用いられている語のなかには、抽象的な名詞として用いられているものが多いこと、また、「一の」型専用の語のなかには、今回の調査範囲には現れなかったものの、実際には「一な」型が用いられている語が含まれていることが明らかになった。このことを踏まえると、やは

り外来語の連体修飾用法全体の傾向として「一な」型の割合が高まる動きがあったと言える。

5. 「一な」型専用へ交替する語について

前節で、外来語の連体修飾用法全体の傾向として「一な」型が増加する動きがあったことを明らかにした。以上の結果に基づき本節では、「一な」型専用へ交替する語における使用の推移とその時期について、詳しく検討を行う。

5.1 「ロマンチック」における「一の」「一な」型の年代推移

まず、特に用例数が多く取れた「ロマンチック」を事例として、「一の」「一な」型の年代推移を図1に示す¹¹。また、用例を1900年代から10年代ごとに、それぞれ(16)「一の」型、(17)「一な」型の順に示す。

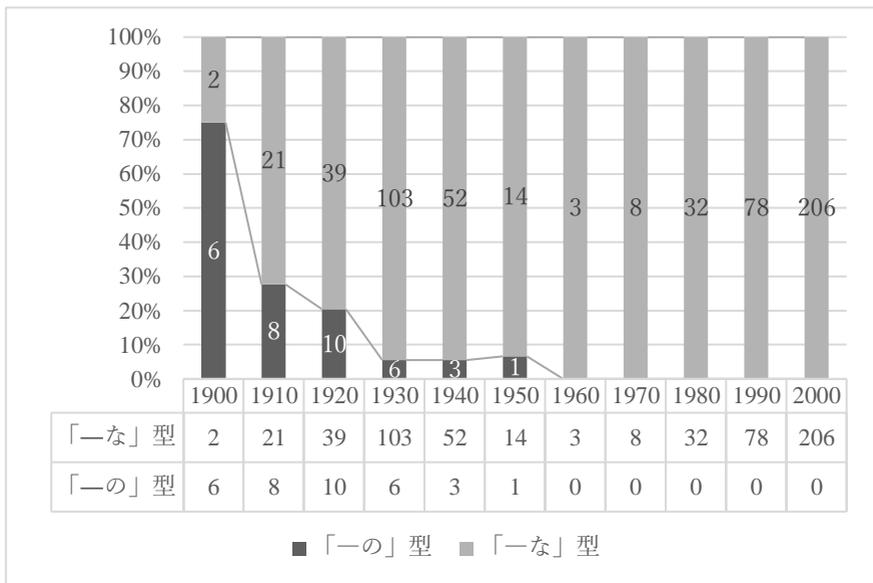


図1 「ロマンチック」における「一の」「一な」型の年代推移

(16) a. 最近の文藝思潮は、そんな古ぼけたロマンチックの夢想などを含んで

¹¹ 成立年が不明であり、上記の出現数に含んでいない例として、「一の」型が8例、「一な」型が110例ある。いずれも話者や作者の生年から没年が1809年から1966年の区間に当てはまり、「一な」型の例数が非常に多いことから、「一の」「一な」型併用となっている年代において、図1で示すものより「一な」型の割合が高くなると考えられる。

(15)

居らぬ。 (『太陽』 [1909] 60M 太陽 1909_11046, 61800)

b. 秋のロマンチックの思想を充すに十分なりき。

(『太陽』 [1917] 60M 太陽 1917_13024, 2170)

c. このつぎはもう少しロマンチックのものを御紹介いたしましょう

(1927年9月『京城日報』)

d. 学芸にからまる私のロマンチックの夢を育てた温床であった。

(倉田百三 (著) 『光り合ういのち』 [1937-])

e. 家族のロマンチックの気風にすっかり同化している。

(太宰治 (著) 『ろまん灯籠』 [1940])

f. 事ごとにロマンチックの**アベコベ**だ。

(坂口安吾 (著) 『発掘した美少女』 [1953])

(17) a. ロマンチックな一幕などを描いてみることもあった。

(田山花袋 (著) 『田舎教師』 [1909])

b. あのお里というローマンチックな女は、こんな機を織る女では無かつたろうか

(児玉花外 (著) 『菜の花物語』 [1911])

c. つまり共産なるものはロマンチックな思想で、現実問題ではない。

(1927年2月『大阪毎日新聞』)

d. 物や、又はいろいろなローマンチックな夢なんぞに憧憬れておられませう。

(夢野久作 (著) 『少女地獄』 [1936])

e. その国民文学はロマンティックなものであるだろう

(宮本百合子 (著) 『日本の河童』 [1941])

f. 年甲斐もなく甘いロマンチックな気持ちでしょうか。

(豊島与志雄 (著) 『死因の疑問』 [1951])

g. ロマンチックな喜劇「伯爵夫人」

(1967年3月夕刊12面『東京朝日新聞』)

h. 清純でロマンチックなふん囲気

(1977年2月夕刊5面『東京朝日新聞』)

i. そうしたロマンチックな言葉をいわせる余裕を、失わせたのかもしれない。

(『化粧』 [1982] OB2X_00264, 15720)

j. この世のものならぬ架空のロマンティックな話

(『映像の技術』 [1993] LBh7_00016, 31310)

k. ずっとCMのストーリーのようなロマンチックな恋愛に憧れていた。

(『Yahoo!ブログ』 [2008] OY11_01963, 4060)

用例が見られ始める 1900 年代においては「一の」型が 75%と優勢であったが、1910 年代には「一な」型が 72%と逆転し、それ以降は「一な」型優勢のままとなる。特に 1930 年代になると「一の」型が 6%と、1920 年代の 20%から急激に「一の」型の割合が下がり、1950 年代を境に「一の」型が見られなくなったことが確認できる。この結果から、「ロマンチック」の「一な」型への移行は、1910 年代に始まり、1930 年代にほぼ完了、1960 年代には完全に移行したと見られる。

5.2 「一な」型への移行の動き

「ロマンチック」で見られた移行の動きが、他の「一な」型専用へと移行した外来語にも共通するものなのかを確認する。「一な」型専用へと移行した、⑦⑧に該当する 30 語を、「一の」型の用例が見られなくなった年代ごとに整理し、「一の」型と「一な」型の使用の推移を調査した結果、1920～2010 年代と幅広いことが確認できた。また、1920 年代に見られなくなった語が 1 語、1930 年代が 4 語、1940 年代が 4 語、1950 年代が 3 語、1960 年代が 4 語、1970 年代が 3 語、1980 年代が 1 語、1990 年代が 4 語、2000 年代が 5 語、2010 年代が 1 語となっており、ある年代に集中して「一の」型の用例が見られなくなったということも確認できない。このことを踏まえると、漢語において見られた、1917～1925 年の区間に「一な」型の増加率が飛躍的に高まっているというような共通性が、外来語には見られないかのように思われる。

しかし、最も語数が多い 2000 年代の語を見ると、「一な」型の増加率の高まりは、「一の」型の用例が見られなくなった年代と一致しないことが考えられる。

「アプリオリ」は 1990 年代には 1 件しか確認されない状態であり、さらに 1940～1980 年代には用例が抽出できなかったため、どの年代において「一な」型の増加率が高まったのかを判断するのが難しい。また、「エゴ」「エンドレス」は各年代において「一の」型が 1 件ずつしか出現しておらず、「モダン」は使われ始めた時期から「一の」型の使用率が 20%を下回っており、使われ始めた時期からそもそも「一な」型の使用率が高い語である。このことから、2000 年代になって初めて「一な」型のみが用いられるようになったといっても、それがそのまま 2000 年代に「一な」型の増加率が高まったということには繋がらないと言える。1960 年代の「ロマンチック」においても、5.1 で示したように、1930 年代には「一な」型への移行がほぼ完了しており、「一な」型の増加率が高まったのは、1960 年代とするより、1930 年代頃とする方が適切であると考えられる。

そこで、「一の」型の用例が見られなくなった年代ではなく、「一の」型の使用率が減少した年代に注目する。「減少した年代」は、各年代において「一の」

(17)

型の用例数が 20%¹²を下回った時期を基準とした。また、前述したように、「エゴ」「エンドレス」「モダン」といった、「一な」型の増加率がどの年代において高まったのか判断するのが難しい 20 語¹³については、比較対象から除く。よって、ここでは、⑦⑧に該当する 30 語のうち 10 語（「アカデミック」「アブノーマル」「アンバランス」「オーソドックス」「デカダン」「テクニカル」「ニヒル」「ハイカラ」「ロマンチック」「リズムカル」）を対象とする。詳細な例数の推移は、稿末に補足資料として、「一の」型の使用率が 20%を下回った年代順に示す。

この 10 語で比較した結果、図 2 に示す「アカデミック」をはじめ、「デカダン」「テクニカル」「リズムカル」「ロマンチック」の 5 語が、1930 年代に「一の」型の使用率が 20%を初めて下回っていたことが確認された。対象とした語のうち半数が集中していることに基づけば、1930 年代に「一な」型の増加率が高まったのではないかと見られる。また、「一の」型の使用率が 20%を下回っているかという基準ではなく、「一な」型が「一の」型の用例数を逆転したという基準で見ると、1920 年代の 4 語が一番多かった。よって、「一な」型の増加は、1920 年代に始まり、1930 年代に最も顕著であったと言えるのではないだろうか。

¹² 「一の」型の使用率が 10%を下回る場合は「一の」型の用例が 1 例以下になるため、ここでは 20%を基準とした。

¹³ 比較対象から除いた 20 語は、「一な」型専用そのままの語」に寄っている 11 語、得られる年代に限りがある 9 語である。11 語については、「一の」型の用例が、全年代で 20%を下回っている 5 語、グラフに示される用例全体で 2 件以下であった 4 語、各年代で 1 件ずつしか見られず全体で 3 件しか見られなかった「エキゾチック」、3 件が各年代で 1 件ずつしか見られないことに加え、残る 1 件も 50%であった「シリアス」である。

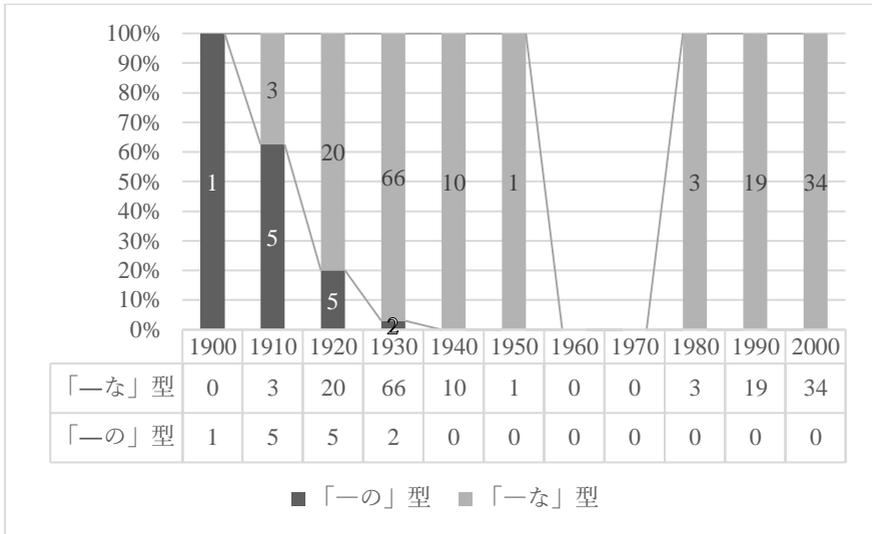


図2 「アカデミック」における「一の」「一な」型の年代推移

5.3 1930年代に「一な」型が増加した背景

前項で、外来語の「一な」型の増加率が1930年代に高まったことを明らかにした。本項では、外来語の連体修飾において、なぜその年代に「一な」型が増加したのかについて考察する。

まず、第一に考えられる背景としては、借用語の連体修飾全体において1930年代に「一な」型が増加する動きがあったということが挙げられる。しかし漢語においては、永澤（2011）が1917～1925年に「一な」型の増加率が飛躍的に高まっていることを明らかにしており、漢語は外来語よりも早い段階で「一の」型から「一な」型への交替が起こったと言える。

このことから、外来語の連体修飾において「一な」型が増加したのは、漢語の連体修飾において「一な」型が増加した流れを受けたからではないかと考えられる。そもそも外来語は、原則として、漢語の文法的な型に沿った形で日本語の文法体系に組み込まれていることが、茂木（2012）によって指摘されている。また、第4節において確認したように、外来語の連体修飾は受け入れ段階から「一の」型が選択されることなく、「一な」型が選択されるものが非常に多かった。これらのことから、漢語における「一の」型から「一な」型への交替という日本語化の動きがあったことを受けて、外来語の連体修飾においても「一の」型から「一な」型へ交替し、それにより外来語は漢語より遅い時期に「一な」型が増加したのではないかと考える。

では、漢語より遅い時期のなかで、なぜ 1930 年代だったのか。まず、考えられるのは、外来語の受け入れそのものが 1930 年代に多かったからではないかということである。しかし、20 世紀の読売・朝日両新聞の社説と国会演説を対象とし、外来語の量的推移について考察した橋本（2010）によって、外来語が最も大きく増加する時期は、それよりも遅い 1950 年代後半から 1960 年代前半であることが明らかにされている。ただし、橋本（2010）は、戦前・戦中である 1926～1945 年でも、外来語¹⁴はゆっくりと増加しており、特に 1930 年代後半以降は増加が顕著になることも述べている。また、見坊（1977）は、辞書に掲載される外来語¹⁵が 1920 年代後半から 1930 年代前半に増え始めることを、米川（2012）は、近代化の中で「日本モダリズム」と呼ばれた 1920 年代初めから 1937 年頃は、戦後に次いで「外来語が氾濫」した時期であったことを指摘しており、これらのことに基づけば、1920～1930 年代は 20 世紀後半に次いで、外来語の受け入れが多かった時期であると考えられる。

一方、外来語を日本語化して受け入れる形が 1930 年代にできたことで、「一な」型の増加率が 1930 年代に高まったのではないかということも考えられる。外来語が日本語化する時期というのは、日本国民のなかで英語との親和性が高まっていた時期でもあるのではないかと考えられる。この時期というのは、新たな事柄や概念を浸透させる有効な手段として学校教育が挙げられることから、日本において英語教育が大衆化した時期と言えるのではないだろうか。英語の国民教育化が達成したのは、1950～1960 年代であるということが寺沢（2014）によって明らかにされている。寺沢（2014）は、中学校英語において、1950 年代には「すべての生徒が 1 度は学ぶ」、1960 年代は「全生徒が 3 年間学ぶ」という状況であったことを述べており、1930 年代の日本においては、国民全体と英語との親和性はそこまで高くはなかったものと考えられる。ただし、今回の調査で用いたデータは、小説や新聞、国会演説といった高い教養を持つ知識人によって使用されたものが多く、話者・著者は一般的な日本国民に比べれば英語に慣れ親しんでいたのではないだろうか。よって、知識人の間では積極的に日本語化して受け入れられていた外来語の様相が、今回のデータに現れている可能性もあると考えられる。

¹⁴ この「外来語」というのは普通名詞に限ったものであるが、橋本（2010）は「普通名詞」を、固有名詞・数量名詞以外の語と定義しているため、本稿で対象としている性質・属性を表す連体修飾の外来語も含まれると言える。なお、「固有名詞」は「人名、地名、社名、組織名」を、「数量名詞」は「具体的な数値に後接する助数詞」と定義している。

¹⁵ 辞書が外来語をどう扱っているのか知ることができるものとして、大部分を外来語が占める、「ハア～ハアン」が見出しとなる区間の語を対象としている。

以上より本稿では、1930年代における外来語の「一な」型の増加の背景に、外来語の受け入れが比較的多かったこの時期に、1917～1925年に起こった「一の」型から「一な」型への交替という漢語における日本語化の動きの影響を想定する。英語の国民教育化の達成が1950～1960年代であること、本稿で対象とした例に知識人層によるものが多いことを鑑みて、外来語の流入が最も多かった1950年代以前に既に、文法的な型としての日本語化は進んでいたものと考えたい。

6. まとめ

以上、外来語の連体修飾形「一の」型と「一な」型の年代推移を調べた。対象とした262語の推移パターンを分類し、漢語とは異なり、最初から「一な」型で受け入れられた語が多いことや、「一の」型に限定される語が非常に少ないこと、現在用いられている「一の」型の語には抽象的な名詞化をしているものが多いことを明らかにし、全体の傾向としては「一な」型の割合が高まる動きがあったことを示した。

この結果に基づき、「一な」型が増加する動きがいつどのように見られるのかを、「一の」型専用から「一な」型専用へと移行した語、「一の」「一な」型併用から「一な」型専用へと移行した語を対象として考察し、これらの語の「一な」型の使用割合が急激に増加している年代を比較し、1930年代を中心として、「一な」型の増加率が高まっていることを明らかにした。そして、この外来語の連体修飾における1930年代の「一な」型の増加の背景として、外来語の受け入れが多かった1920～1930年代に、漢語における「一の」型から「一な」型への交替という日本語化の動きの影響があったことを想定した。

辞書

『日本国語大辞典』小学館、第2版

使用資料

朝日新聞記事データベース閲覧IIビジュアル『朝日新聞縮刷版1879～1999』

<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>

神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『新聞記事文庫』

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>

国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編1雑誌』（短単位データ1.2）

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi

国立国語研究所（2020）『昭和話し言葉コーパス モニター公開版』

<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/showaCorpus/>

国立国語研究所 (2020) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

全文検索システム『ひまわり』(ver.1.6) 用『青空文庫』パッケージ

<https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>

全文検索システム『ひまわり』(ver.1.6) 用『国会会議録』パッケージ

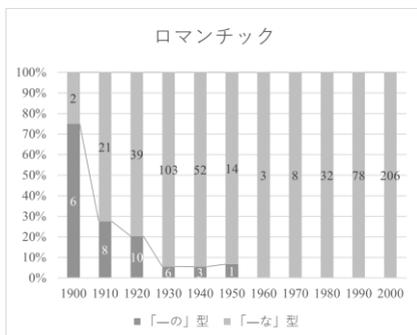
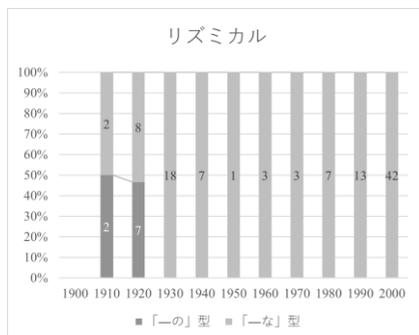
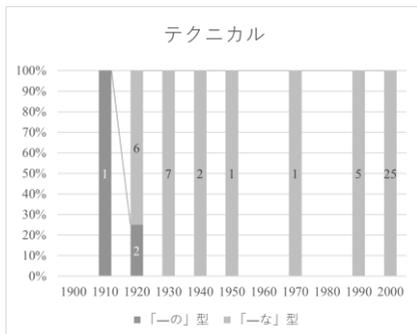
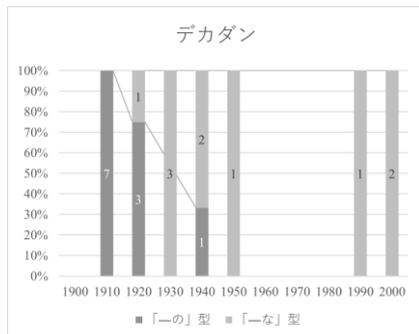
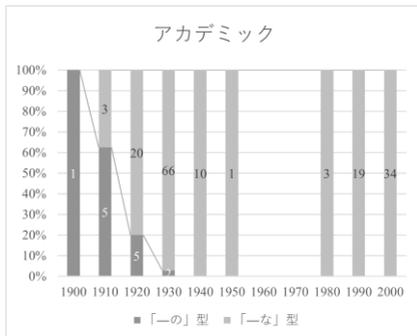
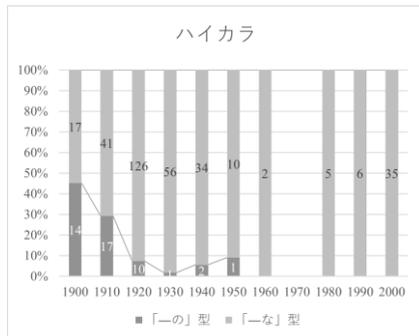
<https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?kokkai>

参考文献

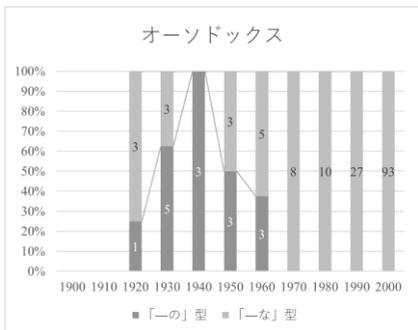
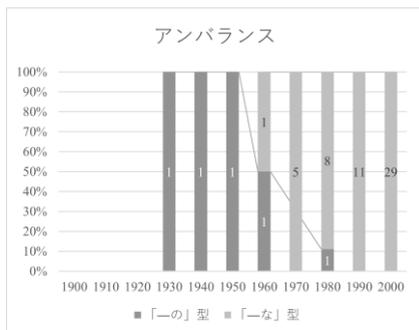
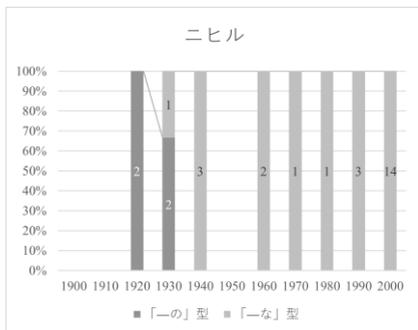
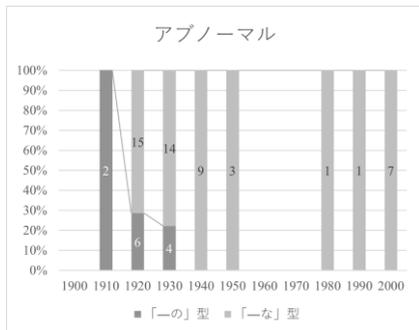
- 小木曾智信 (2008) 「明治・大正期における形容動詞の連体修飾の形」 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』 ころしお出版, pp.333-351.
- 見坊豪紀 (1977) 「日本語の辞書 (2)」 『岩波講座日本語 9 語彙と意味』 岩波書店, pp.323-369.
- 焦曉璐 (2020) 「接尾辞「-さ」の接続性からみるナ形容詞とノ形容詞の性質」 『国語学研究』 59, pp.128-142.
- 田野村忠温 (2002) 「形容動詞連体形における「な/の」選択の一要因—「有名な」と「無名の」—」 『計量国語学』 23(4), pp.207-213.
- 田野村忠温 (2008) 「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」 『待兼山論叢文化動態論篇』 42, pp.55-76.
- 陳志文 (2015) 「形容動詞連体形における「な/の」の選択条件について—「有名」「有限」「有数」の考察を中心として—」 斎藤倫明・石井正彦 (編) 『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』 おうふう, pp.78-94.
- 寺沢拓敬 (2014) 『「なんで英語やるの?」の戦後史—《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』 研究社.
- 戸田利彦 (2004) 「外来語に関する基礎的研究 (12) —“女性”にかかわる外来系「な」形容詞の意味用法—」 『比治山大学現代文化学部紀要』 10, pp.25-34.
- 永澤濟 (2011) 「漢語「一な」型形容詞の伸張—日本語への同化—」 『東京大学言語学論集』 31, pp.135-164.
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 ひつじ書房.
- 松本悠哉 (2017) 「語幹に格助詞を伴う形容動詞の用法について」 『東京大学言語学論集』 38, pp.123-144.
- 茂木俊伸 (2012) 「文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—」 陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 (編) 『外来語研究の新展開』 おうふう, pp.46-61.
- 米川明彦 (2012) 「言葉の西洋化—近代化の中で—」 陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 (編) 『外来語研究の新展開』 おうふう, pp.62-77.

渡邊ゆかり (2014) 「『プライベートな+名詞』と類意表現との使い分け」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』17, pp.1-29.

補足資料 ⑦⑧に該当する10語の推移



(23)



(かたおか・みなみ 令和2年度本学卒業生)